

東京医科大学が医学部の入学試験で女子受験者の得点を一律に減点し、合格者数を抑えていました。

今春の一般入試の合格者のうち女子は17・5%で、女子比率が最低ランクの東京大学(16%)とあまり違いません。もっとも私が東大医学部を卒業した1985年は卒業生90人のうち女子はたった3人でしたから、隔世の感があります。

経済協力開発機構(OECD)の報告書によると、加盟国平均の女性医師の比率は2000年の38%から、15年に46%まで上昇しました。日本は最下位で、16年末で21・1%でした。それでも14年より6・3%も数が増え、20歳代は

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

女性医師が働きやすい環境

医師の3分の1が女性です。「離職率が高い」「体力のある男性の方が医師に向いている」といった否定的な意見が東京医科大学で起きた問題の背景にあるようですが、本当

に女性は医師に向いていないのでしょうか。昨年、米国の有力な医学専門誌で、女性医師が担当した入院患者は男性医師が担当するより死亡率が低いという論

文が載りました。11～14年に米国で内科疾患のため入院した高齢者150万人分のデータから、男女がそれぞれ担当医だった場合で、患者の死亡率や再入院率を比べました。その結果、女性医師が担当した場合、死亡率と再入院率がともに3～4%低くなるこ

とが判明しました。わずかな差に見えますが、米国における03～13年の高齢者の死亡率の低下とほぼ同じレベルです。から大きな開きといえます。がん治療も激務と思われるがちですが、放射線治療は女性医師が働くのに適している診

療科だと感じています。放射線治療医の仕事は主に患者さんの診療とコンピュータを使った治療計画の作成です。外科系の診療科に比べて時間外に呼ばれることが少なく、働く時間を自分でコントロールしやすい利点があります。

東大病院の放射線治療部門で働く医師の約3分の1は女性です。子育てと診療を両立させている女性医師もいます。遠隔で治療計画を作ることのできるのも、自宅で子供をみながら仕事をするという働き方も今後広がるかもしれません。放射線治療が医師の働き方改革のお手本になってほしいと思っています。

(東京大学病院准教授)